



大泉小だより

令和5年11月30日
練馬区立大泉小学校

大人が育てる子供の心

校長 佐々木 秀之

鮮やかな紅葉の頃となりました。子供たちは落ち着いて学習に取り組むとともに、12月の持久走記録会に向けて、休み時間練習に励んでいます。

さて、最近では学校や家庭教育に対して厳しい目が向けられるようになり、週刊誌やテレビ番組では「学級崩壊」「家庭崩壊」「児童虐待」等のタイトルを多く目にするようになりました。しかし、子供の成長にとって一番大きな影響をもつ存在は親と教師といえます。親や教師は、子供にとって常に身近にいて、精神的安定をもたらしてくれる「安心な存在」であり、生きるためのすべを教えてくれる「尊敬できる存在」でなければなりません。

*

「子供が育つ魔法の言葉」(ドロー・ロー・ノルト、レイナル・ハリス著)という本があります。この本の中心となっている「子は親の鏡」という詩は、かつて日本において「アメリカインディアンの教え」(この詩はアメリカインディアンの子育ての知恵を説いたものだと誤解されてしまいました)という題で紹介されました。この本は主に幼児期から小学生をもつ親向けに書かれたものですが、親と教師にとってここから学ぶべきことは数多くあります。例えば、子供によくない影響を与える言葉として「けなされて育つと、子供は人をけなすようになる」「不安な気持ちで育てると、子供も不安になる」「叱りつけてばかりいると、子供は『自分は悪い子なんだ』とってしまう」など7項目をあげており、よくない言葉を使わない手立てが書かれています。

その例として、ジュースをこぼした子供がキッチンタオル一枚でジュースをふき取ろうとしているのを母親が見て、母親はカッとならないように深呼吸した後で、「まあ、お母さんも手伝うわ。よくやったけど、キッチンタオルより雑巾とバケツがいるわね。」という例を用い、「子供の努力を認め、褒めることは大切なことです。子供は努力を認められ、褒められることによって責任感を育てていくからです。」と述べ、厳しい罰を与えるよりも、子供を支え、励ました方が子供はよく学ぶものだと言っています。

よい影響を与えるものとしては、「広い心で接すれば、キレる子供にならない」「褒めてあげれば、子供は明るい子供に育つ」「認めてあげれば、子供は自分が好きになる」「親が正直であれば、子供は正直であることの大切さを知る」など12項目が挙げられています。

*

師走は家庭や地域において子供たちが日本の伝統や文化を理解したり、人とのつながりを考えたりするよい機会です。人とのつながりの基本は、家庭や学校にあります。家庭はもっとも小さな集団社会であり、その次は学級・学年・学校です。集団社会には集団生活を営む上での決まりがあるとともに、長きに渡り引き継がれてきた習慣や先人たちの知恵が受け継がれています。ぜひ、「人とのつながりの大切さ」を感じてほしいと思います。